



長塚圭史さま

# たまには手紙で

7通目



白石加代子より

圭史へ。  
いきなり「さま」を省かせていただきます。

新進気鋭の劇作家・演出家に、こんな馴れ馴れしい態度をとれるのも、長老ならではの思いがりです。しかし私よりもっと若い演劇人が、愛をこめてそう呼んでいるのを耳にしたこともありますし……。

私を「加代ちゃん」と最初に呼んでくれたのは、あなたと同世代の、私の甥や姪たちです。劇団生活の中で、いつも大きな課題を背負われ、息も絶え絶えに、未来を見つめて踏ん張っていたころ、幼いやさしさで愛くるしい笑顔をふりまいて、私と遊んで慰めてくれた、今も親友の、彼女や彼たち！ だから「加代ちゃん」と呼ばれると一瞬、親戚のような気分になります。私はついに人の親にはなれなかつたけれど、彼女らのおかげで、今の若い世代の夢や苦悩を、少しは間近に感じることが出来ました。同じように、演劇界

## とても尊い二つの眼

長塚さんからのおたより そろそろ、加代ちゃんと呼ばせてくださいね。僕が客席で自作を観劇する際、困った観劇態度のお客様が必ずと言っていいほど周りに集まります。でも、彼らがやおら芝居に集中していき様など目に入ると、愛でてやりたくなるのです。現金なものです。

の若い息吹に接するたびうれしくて、つい頼みになってしまう。

ところで、「目立たぬよう、陽炎のように薄まって」、御自分の書いた芝居を、劇場の片隅で、じっと見つめている圭史さん（やっぱり「さん」がついちやうな——）。私は女優として、その二つの眼をとても尊く感じます。舞台の上の演技者は、誰もが、演出家に観てもらいたいものです。おっと、違う人もいるかも……。とにかく、その大切な演出家をお客様！ 今度ね、そういうお客様を叱る台詞を私に与えて下さい。舞台の上から私が怒鳴りつけます。

なんてね、若いころ私は、客席がとても恐かったです。じっと凝視されるんですから、当たり前ですよね。そのたぐさんの眼から逃れるためには、客席を見なければいのですが、私のいた劇団の芝居は前衛劇でしたから、対話であっても2人が向き合わず、正面切って、つまり客

席に向かって語り合うのです。そういう体勢で集中するのは、とても難しいことで、そこで私は客席を見ないようにするために、少しずつ目を寄せて、視界を遮蔽するようにになりました。寄り目をすると、自分の内部がよく見えて、楽でしたから、どんどんエスカレートして、一つのスタイルになっていきました。そのスタイルのせいで、「白石加代子は、自分で自分を模倣している」などと批判されたこともあります。そのあと今度は、その寄り目から逃げるのが一苦労でした。

劇場という空間の中で、お客様と距離を近づけたり、離したり、ある時は断ち切ったり、そんなふうにご客との関係を楽しみながら、舞台上の自分の仕事に熱中している。そんなことが少し出来るようになったのは、つい最近です。やっぱり、加代ちゃん、しっかりと！ という感じですね。

さて、先日「白石加代子の源氏物語」、まさかと思っていましたのに、ほんとうに観て下さって、ありがとうございます。女性客の多い明治座での公演でしたから、大勢の女性のお客様に混じって、どんなお顔であなたが観て下さっていたのか気になります。その日のお客様のお行儀はどんなふうでしたか？

楽しいお話、また聞かせて下さいね。

加代ちゃん

(しらいし・かよこ 俳優)

(ながつか・けいし 劇作家)